黒髪

上

庭が立派だ。雪が積っているのがみえる。敷地に副って、樹が何本も植っている。葉っぱの上に降り積る。「寒いと思った」栄が独語く。「ほんとに」小母が答える。「ことし、始めてじゃない？」「そうかも。暖冬だから、降らないと思ってた」小父はいまいない。仕事に行っている。栄は大学が休みだ。退めてしまいたいと思う。

「ええ、ほんとに」恵が答える。下半身は布団につつまれたまま、上半身を起して、ニコニコとそとをみる。きょうは機嫌がいい。栄が声をかけた。

「寒くない？」

恵はそとを見ていた。雪は降りつづいて、薄すらと、木々に化粧をする。人がみればそうもいえるが、木々からすれば、呼息の止る思いかもしれない。たしかに暖かい日が続いていた。然しこの数日は冷込んで、栄は外部を歩くと、呼息をはあと吐いた。白い烟りは、存在を示して、転瞬に消える。冬だなと思った。あの部屋にいると、時間の感覚が、なくなる。たえられなく長くなる。でも一番苦しいのは、彼女だ。思って、でも俺れだって悽らい、苦しみを、吐き出す。

小父が帰って来た。「お帰りなさい」二つの声が、掛る。「京子」小父が恵にいう、「ただ今」そとを見ていた恵は、父をみて、笑う。

「只今」

小父も笑った。小母も笑った。栄も笑った。心は凍えた。栄は庭をみた。立派な庭、積もった雪、寒い冬。暖たかい冬、……此の家に、通って一年になる事を思う。

中

状態が悪い。「死にたい」「死にたい」恵が叫ぶ。取押えるのは栄の役目だ。小母さんも押さえるが、全然恵の力には敵わない。最初は、女の子の身體に触るのはと躊躇した。しかし、夫で床から飛出し、恵は鋏で喉を突き破ろうとした。今は刃物を室に置いていない。抑える時にも遠慮をしない。胸を触り、服が露けることもある。いまはなにも思わない。嘘だ。女を意識する。好きだった事を思い出す。好きかどうかと自問する。「最ういいのよ」小母が言ってくれた。貴人に責任はないんだし。いや、俺れは……栄はなにも言えなかった。昔しからの、奇縁ですから。言葉は喉を上らず、只床を見つめた。

「助けて、助けて」恵が叫ぶ。「ごめんなさい」涙を溢れさせる。「神代さん」身幹が緊張した。「ああ、ああ、ああ」力が緩んで、脱力した。此所から吹き返す事もあるから、

油断出来ない。恵は茫乎と母をみつめた。涙が横に流れる。枕を濡らした。「お母さん……」母の手を握ると、眠におちた。

栄は息が切れていた。くそと心で吐き散した。好きな、好きな、好きな人。神代さん。感情が徊と腹を旋った。小母の手は震えていた。涙を拭ったおばさんに、めそめそするなと怒鳴りたかった。おれが逃出したらと考えた。逃げ出したら、この二人は何うするだろう……どうもしない。娘のことを、守る丈だ。此様なになった娘を？　何様なになろうと、逃げ出せば、もう拾うものはない。俺れとは違う、……逃げる自分を想像すると、ふたりの憐れに、心が牽かれた。

柔らかい感触が手に残っていた。ずっと知らなかった、恵の膚。神代は知っただろうか。一體どこ迄。想像すると、嫉妬によって、血が燃えた。嫉妬をすれば、悪みというより、怨みになる。怨みは不純だ。だから人を擒らえる。綯い交ぜにして、感情を、思考を、わか

らなくさせる。ただ空しいとだけ思った。亡い人に、うらみが湧いても、返せない……神代の事をしっていた。だから自分が止めるべきと思った。思ったのは、事後だからで、もう遅い。事前に知っても、恋情は、左右出来なかったろう。只栄は後悔した、知らなかった事を、しっていればと思うのは、おろかな丈だろうか。僭越をして、気が晴れるなら、すればいい。ずっと気は晴れない。何をしても、吃度恵を抱いても、気は晴れない。恵が愛して呉れれば……見遣った恵は、寝息を立てて、乱れた髪は美くしい。

下

床の上で、恵が編物をしていた。その途中で、栄は、粥を口に銜ませる。「おいしい」満足げに恵は笑った。おばさんは、すぐ傍で、仮睡をする。最近は、暖かい日がつづく。

「沢山食べて、早く宜くなろうな」栄が話し掛

ける。「はい」莞爾として、恵が答える。「もっと暖たかくなったら、彼所の公園で、散歩しよう。寝てばっかりより、身體動かした方が、元気になるからな」恵は編物に専心し出した。「はい」と答える。栄は最後の一杯を食べさせ様とするが、食べそうにないと思い、鉄匙を措く。

春が来そうだった。此儘暖かくなればと思うが、予報では、来週また冷え込むと言っていた。雪はすっかり溶けた。木々が、緑が顔を出して、日差を浴びている。冬の日差は気持宜い。太陽の恩恵を思い知る。電気を点けなくても、光が満たされて、身體が温まる。

「死にたい」不意に恵がいった。栄は、惴栗として、恵を見やる。恵は外部を見ていた。放心して、編物を、休めている。発作が起きるかと思った。が恵は編物を続けた。ほっとしてしかし目は離さない。小母も、夢に迄届いたようで、顔を上げる。二人で顔を見合せ、ため息を吐く。

恵が死にたいというのが怖かった。発作の前兆とも言えた。然し、それよりも、一種の呪力があった。恵のひと言で、即座に、心が固まる。恵の死にたいが怕かった。恵の助けてが怕かった。いつ迄これが続くだろうと考えて、其真暗なのに驚いた。

小父が帰ってきたので、帰宅した。餐を食べ、少し眠り、風呂に這入る。あしたは学校だと思いだした。何時に起き様、と心を定めた。学校が始れば、彼家に、いる時間が減る。風呂場を眺めた。いい家だな、と思った。他事の様だった。「死にたい」と言う声が反響し、夫が自分の独語だと分かると、もう一度独語いた。